

阿位八幡宮境内の金屋子神社と奥内谷集落

阿位八幡宮には六社の境内社があるが、その内の一社に金屋子神社がある。八幡宮本殿に向って左側に、高さ三、三m・間口一m・奥行一、三mの大きなもので、切妻造り妻入りの社がそれである。



八幡宮の境内にあるのは珍しい。だが、それにはその由来・縁起がある。

そもそも金屋子神は「製鉄」の神（守護神）であり、又鉄産業の祖神として古くより崇め祀られてきたもので、普通社祠の多くは、たたら場・大鍛冶場・鉄師の屋敷内に祀られている。（小祠は製鉄関係の作業場には必ず祀られていた。）

この阿井八幡宮の金屋子神社は、明治四十年十一月十日に、下阿位地区内（どこにあったかは現在不明）にあった金屋子神社を現在地に移したものである。（御祭神は金山彦命・恩兼命・石凝姥命の三神である。）

更にこの神社に、昭和三十八年一月五日、奥内谷集落にあった金屋子神社が合祀され今日に至っている。奥内谷集落は今一軒の家もない状態となっているが、棟札によれば（要約）「当金屋子神社は、奥内谷に鎮座し集落の龍王権現の社に合祀されていた。天正頃（戦国時代）より存し製鉄盛んなりし頃は、約四十戸の住民あり。」又、宝暦

年間（一七五一〜一七六三年）の古文書によれば、「下阿位八幡宮の氏子として重要な地位を占めていたが、昭和に至り人口激減し余す所三戸、遂に此の度全戸挙げて転出の止むなきをもって、御分霊を櫻井家へ、御霊体を当金屋子社に合祀する。」としている。

一方櫻井家文書によれば、奥内谷は櫻井家の三つの大鍛冶場の中の一つであり、江戸時代後期より操業していた所である。大鍛冶場とは、たたら場での製品を諸々の鉄製品（刀・鉄砲・農具・家庭用など）の粗材を造る所で、日常の鉄製品を造るのは小鍛冶場である。あの有名な鉄砲地鉄「菊一印」は、この三つの大鍛冶場で造られていた。（他の二つは、櫻井家本宅前の内谷鍛冶場と木地谷にあった木地谷鍛冶場である。）そして人口は明治初期に二百人余りの製鉄従事者が挙げられている。

製鉄業も明治期に入り洋鉄の進出におされて衰退の一途をたどり、大正の末期には各地の「だたら」は総て火を消した。更に戦後の過疎の波には逆らえず、遂に昭和三十八年には、最後まで残られた渡部源太郎家・竹森勝太郎家・渡部林次郎家の三家により、十一月五日をもって遷座祭（終了祭）を執り行い、現在地の氏神様の境内社に合祀された。感無量のものであったであろう。

かつての奥内谷の集落の方々の心と願いを抱えられた金屋子神は、同位八幡宮の境内に鎮座されている。



遷座祭（右より）福島賢之宮司、渡部敏雄さん、渡部義則さん、竹森さん